

# 学会テクニカルセミナー・大学研究室発表会 「シーズとニーズのマッチングに期待」

日本塑性加工学会 山崎一正 塑性加工戦略委員会委員長に聞く

MF-Tokyo 2017 の期間中、塑性加工の最先端技術に携わる研究者、技術者による成果発表会が行われる。特別協賛する日本塑性加工学会では最新の技術情報などを発信する「学会テクニカルセミナー」、「大学研究室発表会」を開催し、産学によるシーズとニーズのマッチングに期待を寄せる。今回のセミナー、出展ブースの狙いや見どころ、MF-Tokyo などを通じた産学連携の取組みについて日本塑性加工学会の塑性加工戦略委員会の山崎一正委員長（日本金属㈱顧問）に聞いた。

——出展者数、来場者が年々増える中、日本塑性加工学会の「学会テクニカルセミナー」、「大学研究室発表会」の注目度も高まっています。

山崎 学会テクニカルセミナーは日本塑性加工学会の2014年論文賞や技術開発賞の受賞者による講演を皮切りにホットスタンピングや成形シミュレーションの最新動向からマグネシウム、CFRPといった軽量素材をテーマにした取組み、日本ねじ研究協会、レーザ加工学会によるJIS本体規格品の六角ボルト・ナットやレーザ加工技術の開発など幅広い構成となっています。また、「大学研究室発表会」は塑性加工に取り組む主要な大学の

ホットな研究が聞けるのが魅力です。普段は大学の研究がどのように進められているか知るチャンスは少ないと思います。この機会を活かして大学の研究室と企業がシーズとニーズを結びつけるきっかけになってもらいたいと考えています。

——セミナーのテーマに傾向はありますか。

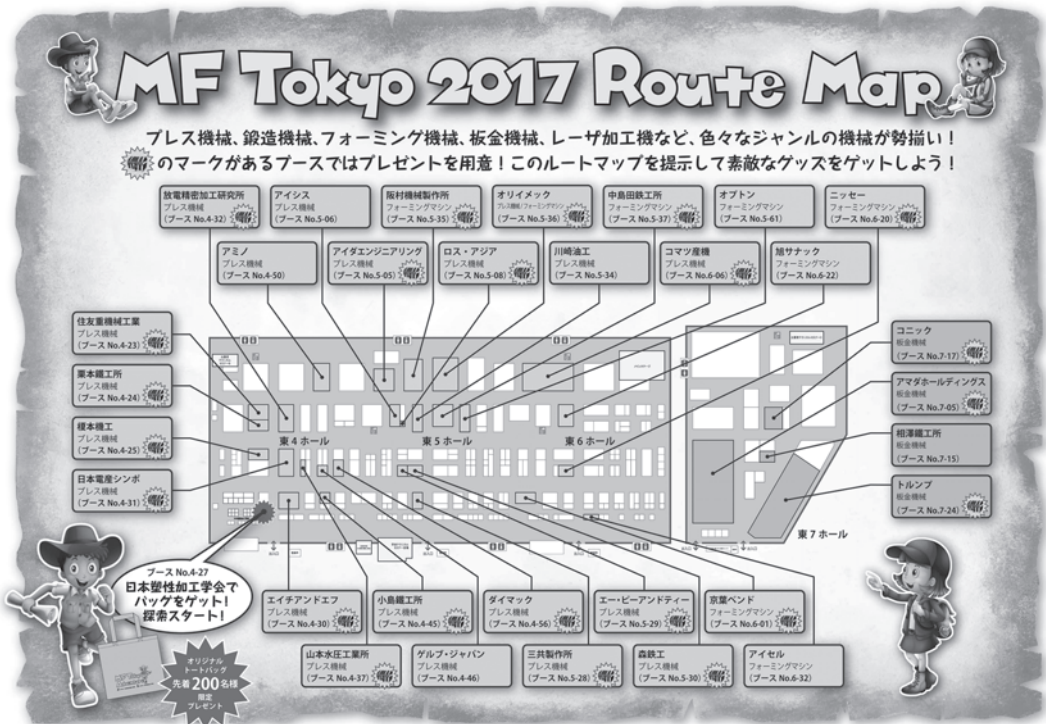
山崎 傾向としては軽量化素材への注目度は高まっています。MF-Tokyo 2017の特別講演ではCFRPを連日取り上げますが、アルミニウム、マグネシウムなどの加工技術も進んできました。特にマグネシウムは周期的に取り上げられてきましたが、今は第3次の波がきているところです。医療機器などで採用が出始めてきたほか、自動車分野へと広げようとの動きも強まってきています。学会テクニカルセミナーでもマグネシウムの医療機器への展開やCFRPの絞り加工などの講演を予定しています。

——今回工夫を凝らされた点は

山崎 今回は特に若い人たちにアピールすることに力を入れました。大学生をはじめ、中学生や高校生、高専の生徒たちに来場してもらうことが将来の人材育成に向けて重要です。特に中高生にとってはプレス機械や板金機械を見るチャンスは少ないので、どういうものか実際に体感してほしい。そのための試みがルートマップです。学生さんたちに日本塑性加工学会のブースに立ち寄りてもらい、そこで日本鍛圧機械工業会がプレス・板金・フォーミングなどの機械メーカーの協賛を得て作成したルートマップを受け取り、それを持って各ブースに行くとプレゼントがもらえる企画です。当会員の先生を通じて関東一円から北陸方面の高専や工業高校に招待状とマップを配布しました。業界を代表する企業ばかりなので、就職を控えた学生にとっても直接話を聞きたい機会になると思っています。ぜひ活用していただきたいですね。



「ぜひ若い人たちに見てもらいたい」と山崎委員長



MF-Tokyo 2017 ルートマップ。お宝マークのブースに同マップを持っていくとプレゼントがもらえる特典もあり

——セミナー、発表会に加え、大学研究室の出展ブースも増えてきました。

山崎 最初のころと比べると出展される先生方も増えてきました。学研究室発表会と合わせてビジネスシーズの探索に活用いただければと考えています。また、大学側にとっても学生が主体的にブースの展示に関わり、自分たちの研究を説明することは非常に勉強になります。特にMF-Tokyoは専門展だけにプロフェッショナルからの踏み込んだ質問が多く、説明者が問い詰められることも少なくありません。そうした経験ができることも本展の良さではないでしょうか。

——日本塑性加工学会では産学連携に向けた取組みに力を入れ始めているようですね。

山崎 MF-Tokyo への特別協賛などを通じて日本鍛圧機械工業会との結びつきが強まり、当学会と日鍛工との産学連による研究開発に着手しました。企業と大学の連携事業はありますが、工業会と学会の連携は珍しいと思います。今回は首都大学東京の楊明教授と日鍛工会員企業によるプロジ



MF-Tokyo 2015 での大学研究室発表会。基礎研究から先端技術までテーマはさまざま

エクトで、プレス加工の「見える化」をテーマにした次世代塑性加工のセンシング技術について取組みます。スタートするにあたって多数のテーマが挙げられましたが、IoT 関連技術への関心が高く、第1弾として決定しました。これを機会に今後、ほかのテーマにも広げていく予定です。本展なども含めて産学連携を通じて業界ニーズを取り込み新しい発想を生み出すきっかけにしていきたい。(編集部)